

2014年3月期 第3四半期 連結決算概況と通期見通し

2014年2月7日
オリンパス株式会社
取締役専務執行役員
グループ経営統括室長
竹内 康雄

- オリンパスの竹内です。
- それでは、オリンパス株式会社 2014年3月期第3四半期決算の概況をご説明申し上げます。

(1) 2014年3月期第3四半期連結業績 およびセグメント別概況

- まず、連結業績についてご説明いたします。

第3四半期決算のハイライト

外部環境

- 世界経済: 米国を中心に緩やかな回復傾向が続いているものの、中国を始めとした新興国市場の先行きや欧州債務問題などに留意が必要
- 日本経済: 景況感の回復により設備投資や個人消費は増加傾向だが、消費税引き上げ前の駆け込み需要を考慮する必要がある

① 全社業績 : 医療事業が牽引し、営業利益は前年比倍増

② 医療事業 : 引き続き好調、過去最高の売上高・営業利益

③ 財務体質 : 自己資本比率は30%超、中計目標を前倒しで達成

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

3

- この3四半期間の外部環境ですが、世界経済は米国を中心に緩やかな回復傾向となりましたが、中国の諸情勢や、欧州の債務問題などもあり、引き続き不透明感の残る状況が続きました。
- 日本経済は昨年から続く円安基調を背景として、企業の設備投資や個人消費の増加傾向が持続し、景気回復の動きに安定感が感じられました。一方で、消費税増税前の駆け込み需要の影響レベルや、また、今後についてはその反動も考慮すべきであると見えています。
- こうした中、当社の3四半期間における事業状況は、ほぼ計画に沿って好調に推移しました。
- 決算における主なポイントはこちらの3点です。
- 1点目は、医療事業が全社業績を牽引し、営業利益は連結ベースで前年同期比倍増となりました。
- 2点目ですが、その医療事業は、第3四半期累計、および、10-12月期の3ヶ月間でも過去最高となる売上高・営業利益を計上しました。
- 3点目は、ここ数年課題であった財務状況が好調な事業利益と円安を背景に大きく改善し、当面の目標としていた自己資本比率30%を超えたということです。

2014年3月期 第3四半期実績(前年同期比) ①連結業績概況

◆10-12月期は増収・増益傾向が鮮明: 営業利益→約3倍、純利益→138億円

(単位:億円)	2013年3月期 3Q累計(4-12月)	2014年3月期 3Q累計(4-12月)	増減額	前年 同期比	2013年3月期 3Q(10-12月)	2014年3月期 3Q(10-12月)	前年 同期比
売上高	5,612	5,137	△ 476	△ 9%	1,555	1,798	+ 16%
販管費 (販管費率)	2,503 (44.6%)	2,674 (52.1%)	+ 171 (+ 7.5pt)	+ 7%	809 (52.1%)	911 (50.6%)	+ 13%
営業利益 (営業利益率)	246 (4.4%)	499 (9.7%)	+ 253 (+ 5.3pt)	+ 103%	66 (4.2%)	214 (11.9%)	+ 226%
経常利益 (経常利益率)	87 (1.6%)	341 (6.6%)	+ 254 (+ 5.0pt)	+ 290%	13 (0.9%)	172 (9.5%)	+ 1,176%
四半期純利益 (純利益率)	76 (1.4%)	58 (1.1%)	△ 18 (△ 0.3pt)	△ 23%	△ 4 (-)	138 (7.7%)	-
<為替レート・影響額>							
円/US\$	80円	99円	19円(円安)				
円/EURO	102円	132円	30円(円安)				
売上高への影響額	-	+ 787億円					
営業利益への影響額	-	+ 195億円					

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

4

- こちらは、連結の業績概況です。
- この3四半期間は、医療事業、およびライフ・産業事業は増収となったものの、昨年9月に情報通信事業を譲渡したこと、並びにコンパクトカメラ市場の縮小が続く映像事業の減収を主な要因として、売上高は前年同期比9%減の5,137億円となりました。
- 営業利益は、引き続き好調な医療事業が全社業績を牽引し、前年同期比倍増の499億円と大幅な増益という結果でした。
- 純利益については、訴訟損失引当金を約110億円、和解金を63億円、特別損失に計上しましたが、医療を中心に事業が好調に推移したことから、58億円の黒字という結果でした。
- 特に10-12月の3ヶ月間で見ると、増収・増益傾向が鮮明です。売上高は前年同期比16%増の1,798億円、営業利益は約3倍、四半期純利益は5四半期ぶりに100億円を越える138億円となりました。

2014年3月期 第3四半期実績(前年同期比) ②セグメント別業績

◆主要3事業の増益により、営業利益は大幅に改善

(単位:億円)		2013年3月期 3Q累計(4-12月)	2014年3月期 3Q累計(4-12月)	増減額	前年 同期比
医療	売上高	2,702	3,515	+ 812	+ 30%
	営業利益	564	786	+ 222	+ 39%
ライフ・産業	売上高	575	676	+ 101	+ 18%
	営業利益	12	21	+ 9	+ 75%
映像	売上高	869	750	△ 119	△ 14%
	営業利益	△ 88	△ 44	+ 44	-
情報通信	売上高	1,142	-	△ 1,142	-
	営業利益	17	-	△ 17	-
その他	売上高	324	196	△ 127	△ 39%
	営業利益	△ 33	△ 44	△ 11	-
全社・消去	売上高	-	-	-	-
	営業利益	△ 226	△ 220	+ 6	-
連結合計	売上高	5,612	5,137	△ 476	△ 9%
	営業利益	246	499	+ 253	+ 103%

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

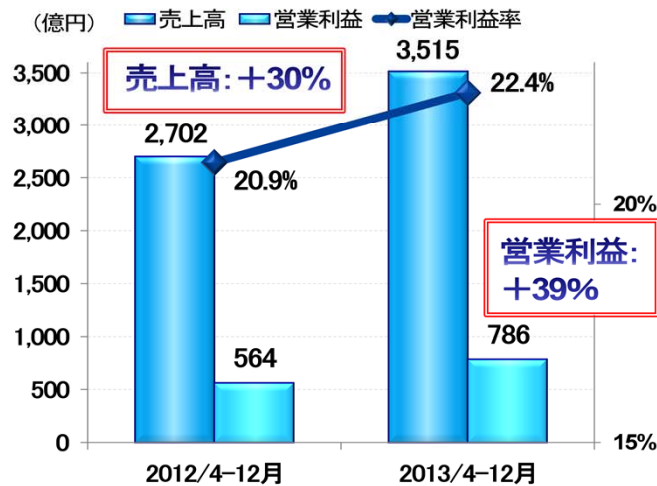
5

- 続いて、セグメント別の業績です。
- こちらの通り、主力3事業の大幅な増益により、全社の営業利益が押し上げられています。
- それでは、事業別に内容をご説明します。

2014年3月期 第3四半期実績(前年同期比) ③医療事業

- ◆ 新製品効果により、3Q・3Q累計共に過去最高の売上高、営業利益を計上
- ◆ 引き続き国内市場が高い成長を維持、欧州も下げ止まり感が見られる

第3四半期累計 (4-12月期)



3Q (10-12月期)



2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

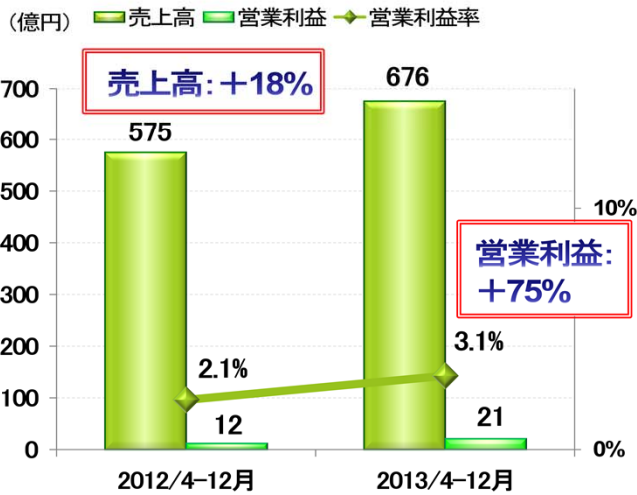
6

- まずは、医療事業です。
- 第3四半期累計の業績ですが、国内、海外ともに消化器内視鏡、および外科内視鏡の新製品が引き続き販売を大きく伸ばしました。また、これまで欧米で販売していた、外科エネルギーデバイス・サンダービートをこの10月から国内市場に導入したことも、業績の拡大に寄与しています。
- この結果、第3四半期累計の売上高としては初めて3,000億円を大きく越える金額を計上し、売上高は前年同期比30%増の3,515億円、営業利益も同じく過去最高となる39%増の786億円となりました。
- また、10-12月期で見ましても、特に好調な国内市場がドライバーとなったことや、欧州も下げ止まり感が見られ、売上高は初めて1,000億円を突破し、前年同期比29%増の1,217億円、営業利益も54%増加し、過去最高となる294億円となっています。

2014年3月期 第3四半期実績(対前年同期比) ④ライフ・産業事業

- ◆ 国内市場の活性化と新製品の販売効果により増収・増益
- ◆ 特に10-12月期は、増収(+22%)・増益(+14億円)傾向が鮮明

第3四半期累計 (4-12月期)



3Q (10-12月期)



2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

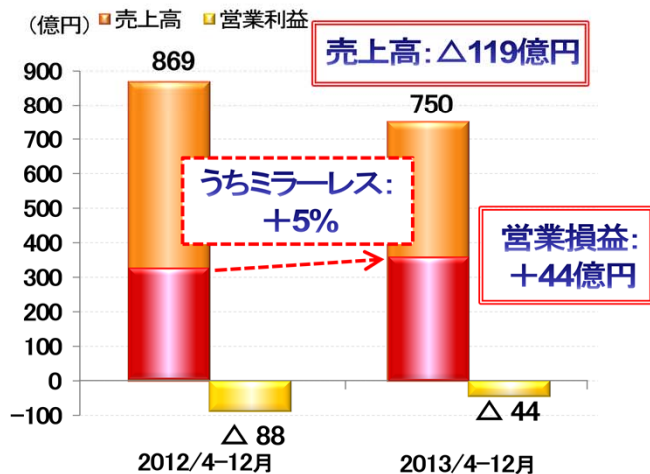
7

- ライフ・産業事業です。
- 第3四半期累計の売上高は、前年同期比18%増の676億円、営業利益は同75%増の21億円となりました。
- また、10-12月期は特に増収・増益傾向が鮮明であり、売上高は22%増の236億円、営業利益は大幅な増益となる15億円を計上しました。
- 事業環境は全体として厳しい状況ではありますが、国内市場における予算執行が徐々に活発化し始めており、昨年導入した新製品の販売が、増収、増益に寄与しています。
- 今後も安定的に収益を確保できるよう、新製品の販売拡大に加えて、生産構造改革などのコスト削減策にも継続的に取り組んでいきます。

2014年3月期 第3四半期実績(前年同期比) ⑤映像事業

- ◆ コスト削減等の適正な費用コントロールを実行し、営業損失は大幅に改善
- ◆ 新製品OM-D E-M1が牽引し、ミラーレスは3Q(10-12月期)に19%増収
 ↳ 売上高比率に占めるミラーレスシフトの推進、交換レンズの売上拡大

第3四半期累計 (4-12月期)



3Q (10-12月期)



2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

8

- 映像事業です。
- 第3四半期も、コンパクトを中心としたカメラ市場全体の縮小が続く厳しい事業環境となりました。
- この影響を受け、3四半期累計の売上高は前年同期比119億円減の750億円となりました。しかしながら、適正な費用コントロールを行い、事業再建策に沿ったコスト削減を進めたことで、営業損失は昨年同期から44億円改善しました。
- また、ミラーレス一眼については、新製品OM-D E-M1が好調に推移したことに加え、OM-Dシリーズと相乗効果の高い交換レンズの拡販も寄与し、10-12月期のミラーレス全体の売上高は前年同期比19%増の142億円となり、期待通りの成長となりました。

2014年3月期 第3四半期実績(前年同期比) ⑤映像事業

損益の状況(4-12月)

● ミラーレス売上高比率*の向上

- ✓ 高級機種OM-D E-M1によって、ミラーレス売上高比率*が向上し、粗利・原価が改善(*2013/3期:35% ⇒ 2014/3期:43%)
- ✓ 交換レンズ本数は昨年比 30%以上増加

● コスト削減施策の進捗

- ✓ 円安による増加要因がありながらも、コスト改善施策によって、販管費削減

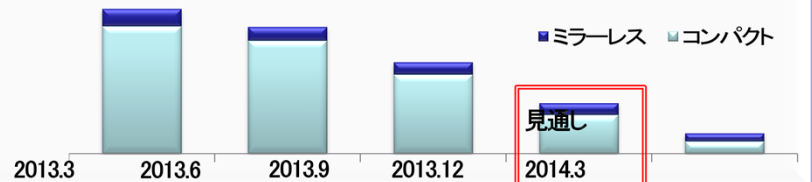
(単位:億円)	2013/3期	2014/3期	増減
売上高	869	750	△119
コンパクトカメラ	466	333	△133
SLR(ミラーレス)	307	324	+17
その他(録音機)	95	93	△2
売上総利益	322	337	+14
販管費	410	380	△29
営業損益	△88	△44	+44

リスクの極小化

● 在庫圧縮の進展

- ✓ コンパクトカメラ在庫は、台数ベースで2013年3月末比 70%減少(うち旧モデルの削減率は90%以上)

在庫削減状況(台数ベース)



2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

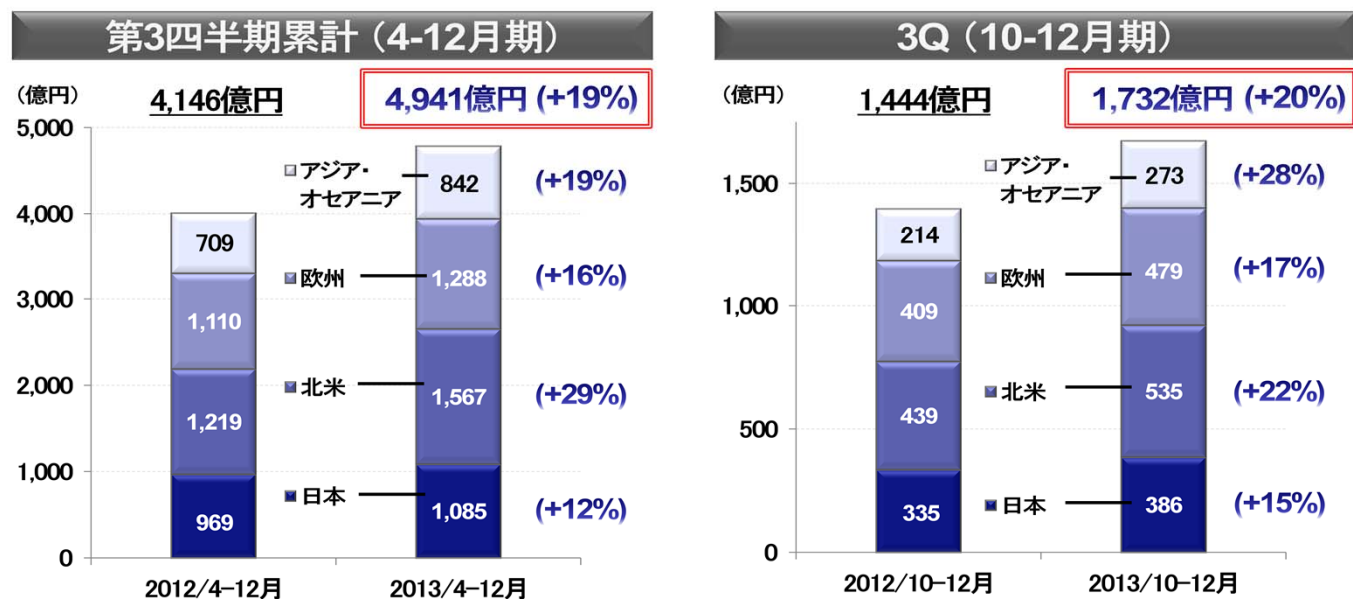
9

- 映像事業の業績について、もう少し詳しくご説明します。
- 2012年3月にOM-Dシリーズを発売して以来、売上高に占めるミラーレスカメラの構成比率は徐々に高まり、フラッグシップ機E-M1を導入したこの第3四半期では全体の40%以上にまで到達しています。このように、収益性の高いミラーレスカメラの売上高比率が高まったことに加えて、交換レンズの販売が前年比で30%以上成長したことも寄与しました。その結果、粗利は前年同期から14億円改善、さらに、コスト削減策によって販管費を29億円圧縮したことで、全体では営業損益を44億円改善することが出来ました。
- また、期初から取り組んでいるコンパクトカメラのリスク極小化では、在庫コントロールを徹底してきたことで、着実に在庫の削減が進んでいます。コンパクトカメラの在庫は台数ベースで、2013年3月末比70%減、うち旧モデルの削減率は90%以上と大幅に圧縮しています。

2014年3月期 第3四半期実績(前年同期比) ⑥地域別売上高(主要3事業)

◆ 好調な医療事業が大きく牽引し、全地域で増収

(医療事業の4-12月期成長率: 国内+23%、北米+37%、欧州+25%、アジア・オセアニア+36%)



2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

(*) グラフは主要3事業(医療、ライフ・産業、映像)の数値 10

- 地域別の売上高はこちらの通りです。
- 好調な医療事業が全社業績を牽引し、4-12月、10-12月期共に、全地域で大幅な増収となりました。
- 医療事業の4-12月期の成長率は、国内23%増、北米37%増、欧州25%増、アジア・オセアニア36%増と、全社業績の大きなドライバーとなっています。

2014年3月期 第3四半期実績進捗状況

医療	売上高	腐敗防止運動等の影響を受けた中国、および計画値の高い北米の未達を好調な日本がカバーし、見通しに沿った進捗
	営業利益	収益性の高い消化器内視鏡の新製品販売が好調に推移し、見通しに沿った進捗
ライフ・産業	売上高	政府予算削減の影響を受けた欧米で売上高が未達となったものの、国内市場の活性化と新製品効果によって日本が見通しを上回り、見通しに沿った進捗
	営業利益	売上高の達成に加え、原価改善、販管費削減によって、見通しに沿った進捗
映像	売上高	OM-Dは好調に推移したものの、PENシリーズの販売台数が減少し、想定水準を下回った
	営業利益	収益性の高いOM-Dの販売比率向上によって粗利・原価が改善したことに加えて販管費圧縮の効果もあり、見通しに沿った進捗

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

11

- 年間見通しに対する第3四半期までの、各事業の進捗状況をご説明します。
- まず医療事業の売上高ですが、腐敗防止運動の影響を受けた中国、および、目標水準を高く設定していた米国において当初の見込みを若干下回ったものの、全体としては消化器、外科分野共に大変好調に推移した日本がドライバーとなり、順調な進捗となりました。営業利益も、収益性の高い消化器内視鏡の新製品販売が好調に推移したことで、見通しに沿った実績となりました。
- 続いて、ライフ・産業事業ですが、欧米で政府予算削減の影響を受けたものの、日本において予算執行が活発に動き始めたことで、昨年投入した新製品の販売が順調に推移しました。営業利益についても、生産構造改革による原価の改善等の効果が徐々に表れており、計画に沿った実績となりました。
- 映像事業ですが、コンパクトの販売は計画通りに進捗し、また、ミラーレスカメラにおいてもOM-Dシリーズは金額ベースで好調に推移しました。一方で、PENシリーズの販売が減少したことにより、全体の売上高は想定水準を若干下回る結果となりました。営業利益は、収益性の高いOM-Dを中心としたミラーレスカメラの売上高比率が向上したことに加えて、その相乗効果によってレンズ付帯率も上昇し、粗利、原価が改善した他、引き続き販管費の圧縮にも取り組んだことで、見通しに沿った進捗となりました。

貸借対照表(2013年12月末)

◆ 自己資本比率は30%超まで回復、中期ビジョン最終目標(2017年3月期)を前倒しで達成

(単位:億円)	2013年 3月末	2013年 12月末	増減		2013年 3月末	2013年 12月末	増減
流動資産 (デジカメ在庫)	5,410 (236)	5,682 (218)	+272 (△17)	流動負債	3,169	2,633	△536
有形固定資産	1,298	1,420	+122	固定負債 (内:社債・長期借入金)	4,915 (4,229)	4,355 (3,570)	△560 (△658)
無形固定資産	1,746	1,816	+70	純資産	1,519	3,289	+1,770
投資その他資産	1,148	1,358	+210	(自己資本比率)	(15.5%)	(31.8%)	(+16.3pt)
資産合計	9,602	10,276	+674	負債 純資産 合計	9,602	10,276	+674
				有利子負債	: 4,336億円(2013年3月末比 △1,268億円)		
				純有利子負債	: 1,844億円(2013年3月末比 △1,464億円)		

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

12

- バランスシートの状況です。
- 自己資本比率ですが、10-12月期の3ヶ月間で四半期純利益を138億円計上したことを主な要因として、31.8%まで回復しました。一時、約2%と危機的な水準まで落ち込んだ時期もありましたが、中期ビジョンの目標水準である30%まで短期間で到達することができました。
- デジタルカメラの在庫ですが、コンパクトカメラの在庫削減を計画通りに進めた結果、全体で2013年3月末から17億円、同9月末からは27億円削減し、218億円となりました。金額的に大きな変動は見られませんが、中身はOM-Dシリーズ等を中心としたミラーレスカメラの戦略在庫に置き換わっているもので、在庫の質という観点では大きく変化しています。
- なお、有利子負債は、総額で3月末から約1,300億円減少の、4,300億円、純有利子負債も約1,500億円減の1,800億円の水準まで圧縮しています。

キャッシュフローの状況(2013年4-12月)

(単位:億円)	2013年3月期 3Q (2012年4-12月)	2014年3月期 3Q (2013年4-12月)	増減
売上高	5,612	5,137	△476
営業利益	246	499	+253
(%)	4.4	9.7	+5.3pt
営業CF	0	438	+438
投資CF	354	△139	△493
財務CF	△314	△217	+97
キャッシュフロー	40	82	+42
フリーキャッシュフロー	354	299	△55
現金及び現金同等物期末残高	2,077	2,484	+406
減価償却費	243	261	+19
のれん償却額	74	70	△4
設備投資額	206	263	+57

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

13

- キャッシュフローの状況です。
- 営業キャッシュフローは、好調な利益に加え、資産圧縮を進めたことから、438億円のプラスを確保することができました。
- 投資キャッシュフローは、139億円のマイナスです。これは主に設備投資関連の支出によるものです。
- 以上により、フリーキャッシュフローは299億円のプラスとなりました。
- また、財務キャッシュフローですが、増資による約1,100億円のプラスはあったものの、期初から約1,300億円の負債を圧縮したことにより、217億円のマイナスとなりました。

(2) 2014年3月期通期見通し

- 続いて、2014年3月期の通期見通しについてご説明いたします。

2014年3月期 連結通期見通し

◆ 連結ベースの3Qまでの進捗はほぼ予定通り、通期見通しは2Q時点の計画値を据え置き

(単位:億円)	2013年3月期 (実績)	2014年3月期 (最新見通し)	前期比 増減額	前期比 (%)
売上高	7,439	7,200	△ 239	△ 3%
営業利益 (営業利益率)	351 (4.7%)	725 (10.1%)	374 (+5.4pt)	+107%
経常利益 (経常利益率)	130 (1.8%)	500 (6.9%)	370 (+5.1pt)	+284%
当期純利益 (当期純利益率)	80 (1.1%)	130 (1.8%)	50 (+0.7pt)	+62%
<為替レート・影響額>				
円/US\$	83円	99円	+16円(円安)	
円/EURO	107円	133円	+26円(円安)	
売上高への影響額	-	+925億円		
営業利益への影響額	-	+240億円		

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

15

- この第3四半期までの進捗は、ほぼ想定どおりに推移しており、連結の通期見通しは前回11月の公表値から変更ございません。
- なお、為替レートは、1ドル99円、1ユーロ133円としています。

2014年3月期 セグメント別業績見通し

◆ 各セグメントも2Q時点の計画値を据え置き

(単位:億円)		2013年3月期 (実績)	2014年3月期 (最新見通し)	前期比 増減額	前期比 (%)
医療	売上	3,947	4,900	+ 953	+ 24%
	営業利益	871	1,100	+ 229	+ 26%
ライフ・産業	売上	855	1,000	+ 145	+ 17%
	営業利益	35	45	+ 10	+ 29%
映像	売上	1,076	1,040	△ 36	△ 3%
	営業利益	△ 231	△ 50	+ 181	-
その他	売上	417	260	△ 157	△ 38%
	営業利益	△ 49	△ 50	△ 1	-
全社・消去	売上	-	-	-	-
	営業利益	△ 293	△ 320	△ 27	-
連結合計	売上	7,439	7,200	△ 239	△ 3%
	営業利益	351	725	+ 374	+ 107%

2014/2/12 No data copy / No data transfer permitted

16

- セグメント別にはこちらの通りです。
- 各セグメントも、前回11月に公表した計画値を据え置いています。
- 引き続き新製品の販売拡大が見込まれる医療事業において、大幅な増収、増益を確保すると共に、映像事業の営業損失改善を目指します。

2014年3月期業績 映像事業の第4四半期

- OM-Dシリーズ及びレンズビジネス強化により、ミラーレス売上比率を高める
- 欧米においても高い評価を受けたOM-Dシリーズのラインナップを拡充

✓ レンズビジネスの強化

レンズ付帯率の高いOM-Dを軸とした戦略により、粗利の向上と、事業の収益性を高める

✓ 欧州・米国市場の活性化

OM-D E-M1の成功事例をベースとして、新たに投入したE-M10で欧米市場の販売を拡大する

	販売状況	
	フラッグシップ	ミドル・エントリー
欧州・米国	OM-D: ◎	PEN: △ ←
日本・アジア	OM-D: ◎	PEN: ○

★ OM-Dシリーズラインナップ

フラッグシップモデル
プロ・ハイアマユーザー

E-M1

ミドルクラスモデル
写真趣味ユーザー

E-M5

2014年1月29日発表(2月末発売予定)

NEW

エントリーモデル
写真をもっと楽しみたい
一眼エントリーユーザー

E-M10

活性化

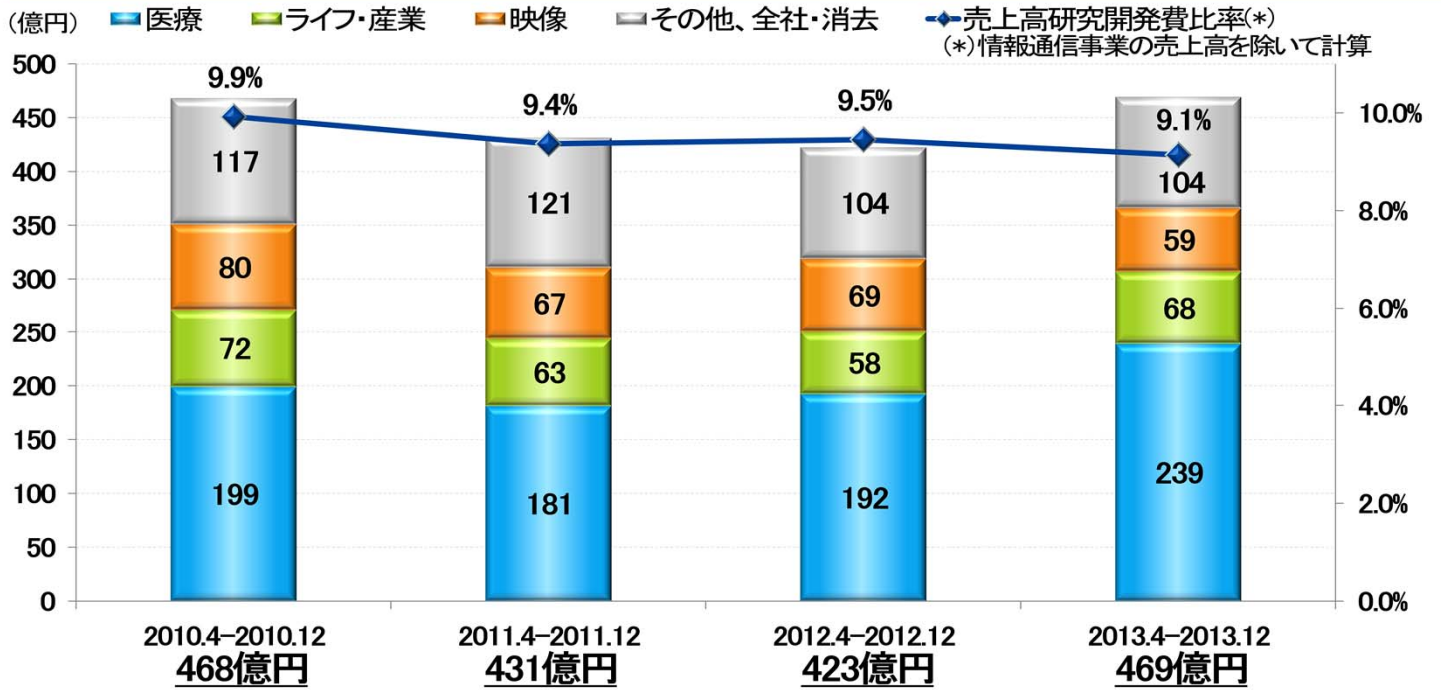
- 映像事業の第4四半期について若干補足をいたします。
- 事業再建策を押し進める上でこの第4四半期は、ミラーレスカメラ、および交換レンズの売上をさらに伸ばし、事業全体の売上と収益性を高めることがポイントになります。
- 今後、ハイエンドからエントリーユーザーまで幅広く訴求するため、これまで以上にレンズラインナップを強化しつつ、特にレンズ付帯率の高いOM-Dシリーズとの相乗効果によってレンズビジネスを拡大していきます。
- そして、このOM-Dシリーズを軸とした戦略において重要なポイントは欧米市場の攻略です。欧米では、日本やアジアと比較して、よりコンベンショナルなカメラが好まれる傾向があり、これまではPENシリーズを中心にミドル・エントリー層において苦戦が続いていました。OM-DシリーズのエントリーモデルであるE-M10を欧米市場に投入することで巻き返しを図り、ミラーレスカメラの売上高拡大を図っていく考えです。
- また、来期については、現在の戦略を加速させ、収益体質の更なる強化に向けた計画を検討して参りたいと思います。

OLYMPUS

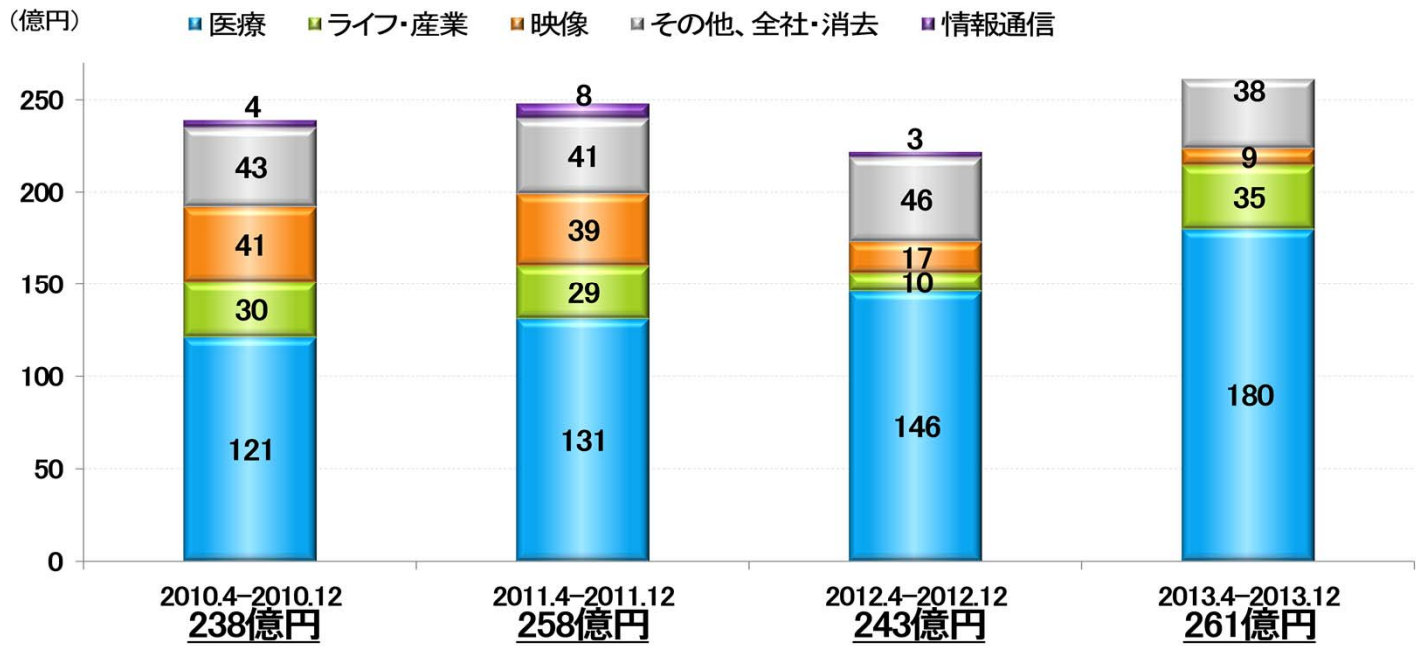
- 最後になりましたが、残り2ヶ月間、本日お話した数値、戦略をきっちりとやり遂げ、来期の更なる利益拡大につなげることが出来るよう、経営陣一丸となり、取り組んでいきたいと思えます。
- ご支援のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

參考資料

【参考資料】 研究開発費

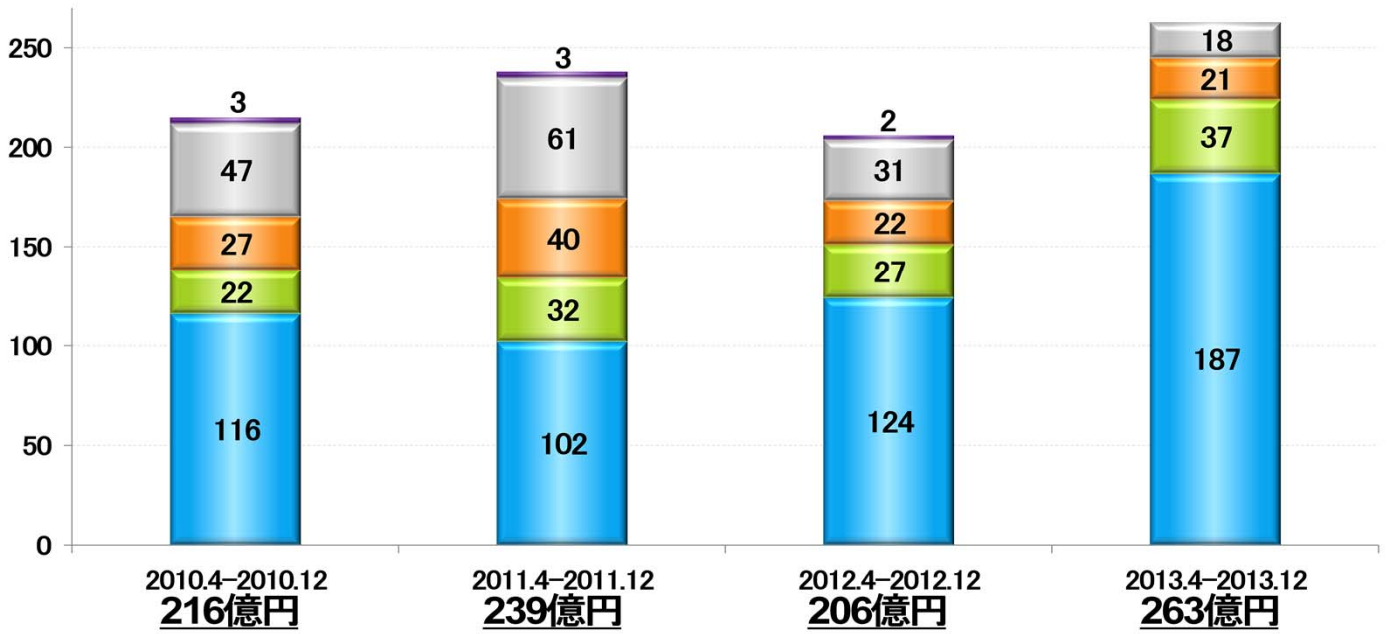


【参考資料】 減価償却費

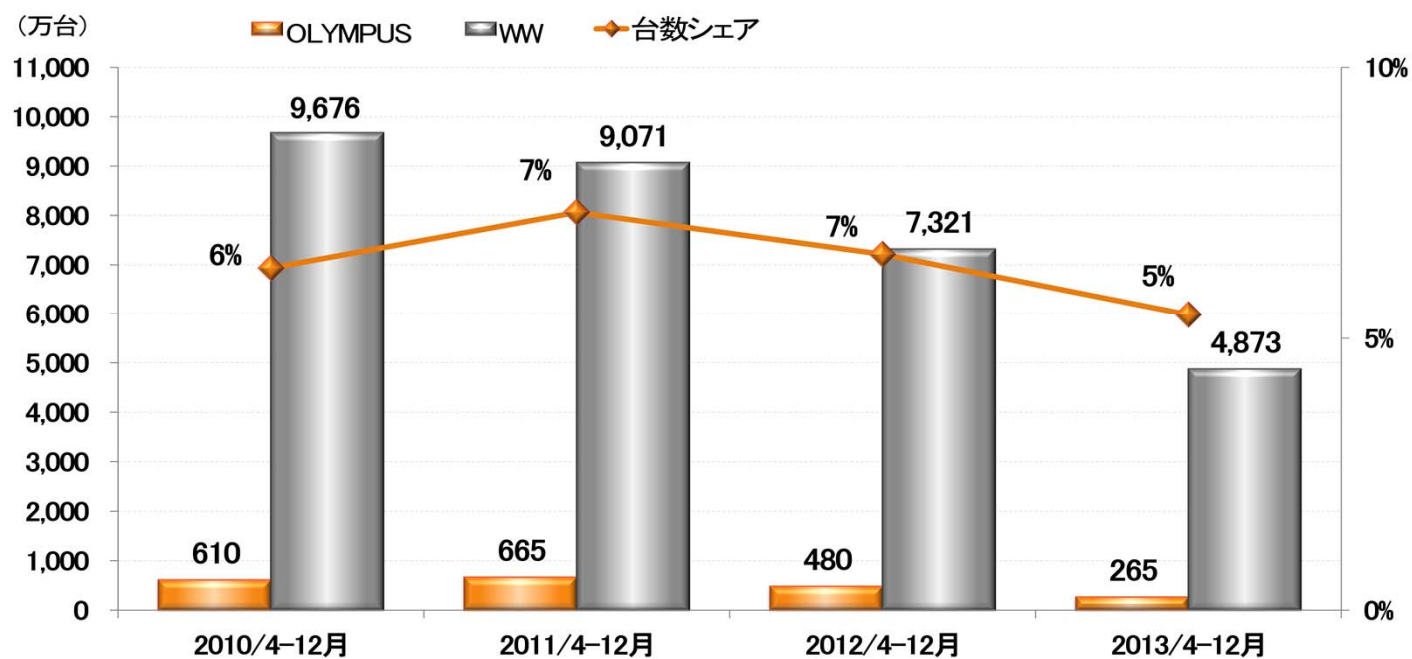


【参考資料】設備投資

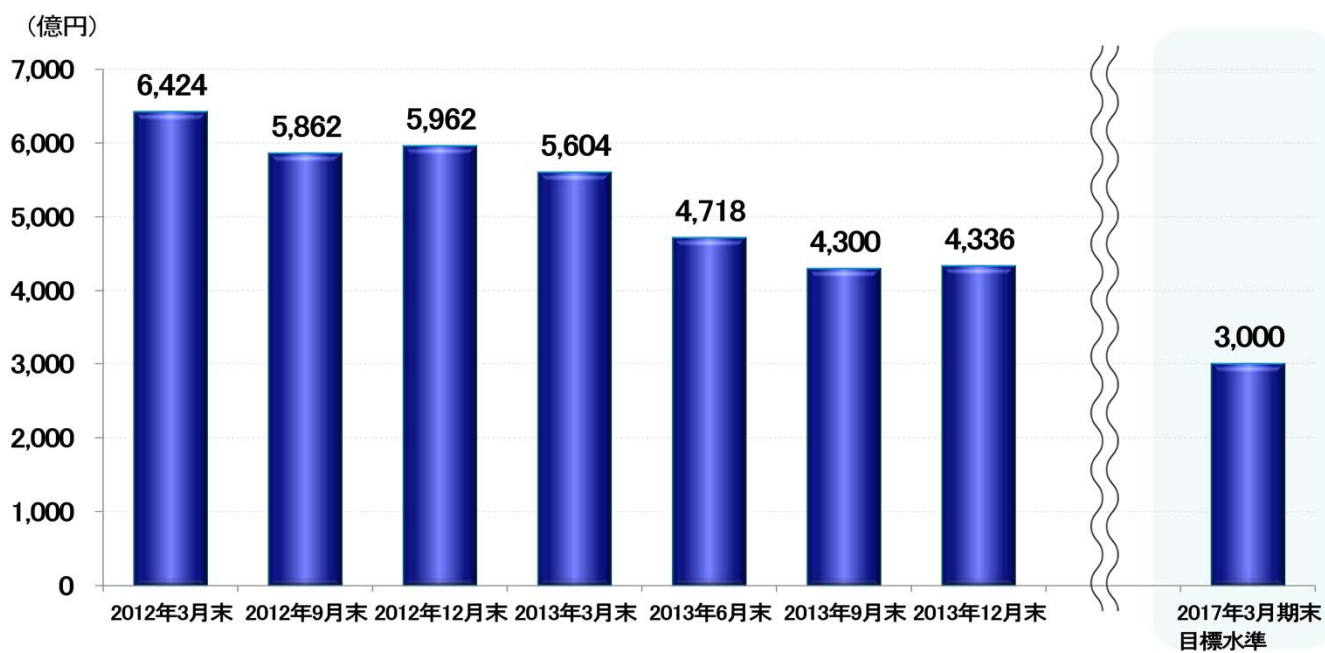
(億円) ■医療 ■ライフ・産業 ■映像 ■その他、全社・消去 ■情報通信



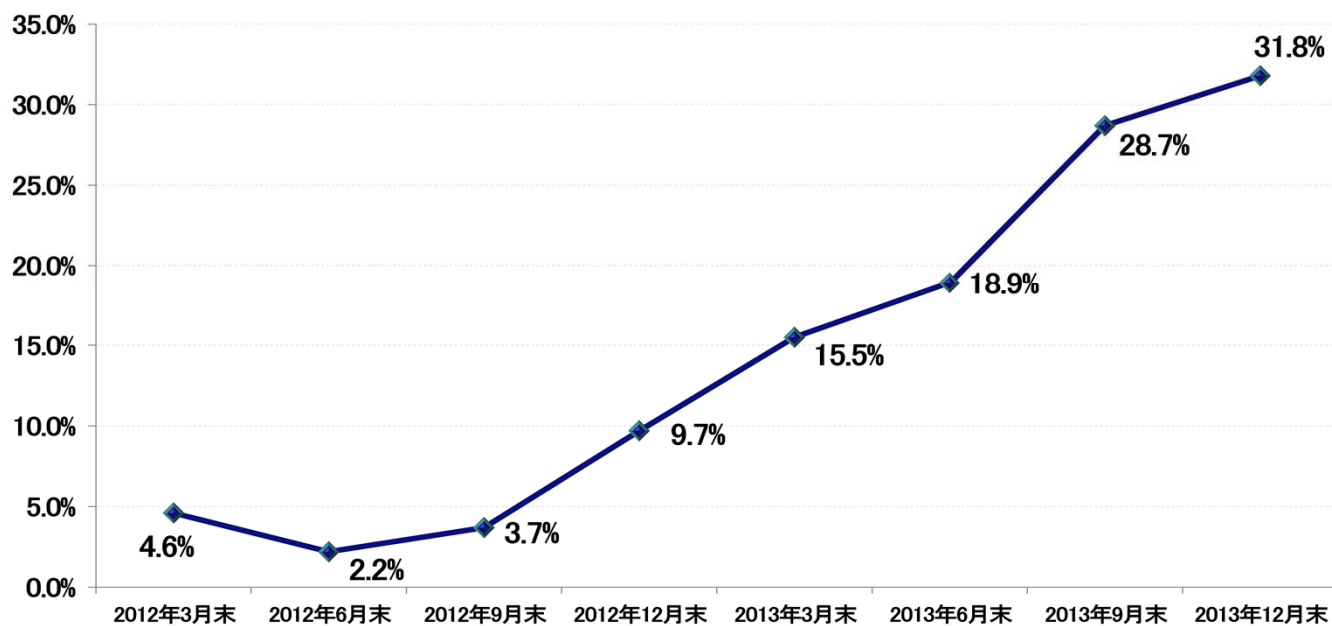
【参考資料】 デジタルカメラ



【参考資料】 有利子負債



【参考資料】 自己資本比率



【参考資料】 中期経営計画(評価指標)

	2013年3月期 (実績)	2014年3月期 第3四半期(実績)	2017年3月期 (目標水準)
投下資本利益率 (ROIC)	2.7%	-	10%以上
営業利益率	4.7%	9.7%	10%以上
フリーキャッシュフロー (営業CF+投資CF)	587億円	-	700億円以上
自己資本比率	15.5%	31.8%	30%以上

【為替前提】 US\$ =90円 EUR=120円

(*) 2013年5月15日発表数値

【参考資料】 中期経営計画(連結目標数値)

	2015年3月期	2017年3月期
売上高	7,600億円	9,200億円
営業利益 (営業利益率)	930億円 12%	1,430億円 16%
経常利益 (経常利益率)	700億円 9%	1,250億円 14%
当期純利益 (当期純利益率)	450億円 6%	850億円 9%

【為替前提】 US\$ =90円 EUR=120円
 (*) 2013年5月15日発表数値

【参考資料】 中期経営計画(セグメント目標数値)

		2015年3月期	2017年3月期
売上高	医療	5,200億円	6,500億円
	ライフ・産業	1,150億円	1,350億円
	映像	1,000億円	1,000億円
	その他	250億円	350億円
	合計	7,600億円	9,200億円
営業利益	医療	1,110億円	1,500億円
	ライフ・産業	90億円	150億円
	映像	70億円	90億円
	その他	▲10億円	10億円
	全社・消去	▲330億円	▲320億円
	合計	930億円	1,430億円

【為替前提】 US\$ = 90円 EUR = 120円

(*) 2013年5月15日発表数値

OLYMPUS

- 本資料のうち、業績見通し等は、現在入手可能な情報による判断および仮定に基づいたものであり、判断や仮定に内在する不確定性および今後の事業運営や内外の状況変化等による変動可能性に照らし、実際の業績等が目標と大きく異なる結果となる可能性があります。
- また、これらの情報は、今後予告なしに変更されることがあります。従いまして、本情報及び資料の利用は、他の方法により入手された情報とも照合確認し、利用者の判断によって行って下さいますようお願い致します。
- 本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。